



#21

可愛いあの娘は●●●●●?

著・監澤たすく
イラスト・かもめ遊羽



「発売1週間でレベル589ってどんだけやりこんでんだよ……」

諏訪君人はすれちがい通信で手に入れた「助っ人キャラ」を見て感嘆のため息をついた。

君人も発売直後からドラハン4——ドラゴン・ハンター4——をかなりやってきたつもりだが、それでもまだレベルは259だった。

「でも、まあ、ありがたく登録させてもらおうと」

君人はそのレベル589の戦士キャラ——「角馬」という名前だった。将棋が好きなのならどうか？——を自分のパーティーに組み入れた。

午後4時の電車はそれほど混んでもなく、君人と同じく下校中の生徒か、あるいは早上がりのサラリーマン風の中年男性がちらほらというだけだった。

そして君人はまだゲームに熱中している振りをして、上目遣いで対面の席を盗み見た。

(神宮寺さん、今日もきれいだなあ……)

君人がうつとりした顔になって見つめているのは、神宮寺円——彼と同じ学校に通う女子生徒だった。

円は静かに手許の単行本を読んでいた。本にすつとかかる艶やかな長い黒髪が、君人にはとても艶惑的に感じられた。

完全に整った目鼻立ちは、ともすれば冷たい人形のような美しさを纏いがちだが、円の場合それがまるで女神のような荘厳さを伴っており、黄金比どんぴしゃなバランスがとれていた。

すれ違う人の十人が十人、振り返るであろう美しさだった。

彼女が毎日この時間の、この車両で下校すると知ってから、君人は密かに帰宅時間を合わせて彼女を眺めるのが習慣になっていた。……決して声をかける勇気などはなかったけれど……。

『まもなく御塚神泉1、御塚神泉1』

車内アナウンスが響き電車が停まると、円はそつと本を閉じ、ゆつくりとドアから外に出て行った。その一挙手一投足が、いかにもお嬢様然としていて、君人は惚けた表情で彼女の背中を見守った。

「あ……」

彼女が座っていた席に何か落ちている。

手帳だ。

君人は慌ててそれを拾うと、円に声をかけようとした。だが、電車のドアはすでに閉まっており、彼女も改札への階段を登っていくところだった。

「あ……」

君人はただ、改札に消えていく彼女の後ろ姿を見送ることしかできなかった。

「兄ちゃん、お帰りー」

「おう」

テレビを見ながらの妹・恭子の呼びかけにぞんざいな返事をして、君人は2階の自室に閉じこもった。

その手にはあの手帳。

神宮寺さんらしい、シンプルで可愛いデザインの、パステル調の手帳だった。

君人はそれをしばらく矯めつ眇めつしていたが、やがて感極まったように叫んだ。

「ひゃっほー！ とりあえずこれで話しかけるきつかけができたぞー！ やったー！ ……でも、なんて言っただろうかなあ……あんまりうだうだ言っても印象悪いだろうし、かといって返すだけじゃ10秒で会話終わっちゃいそうだし……」

君人は手帳を真剣に見つめた。

傍目には手帳と会話している危ない人だった。

「あー……なんか微かにいい匂いがあるなあ……これが神宮寺さんの香りか……」

単純にただの危ない人だった。

（この手帳って……中、何が書いてあるんだろう）

君人の心に悪魔の囁きが聞こえた。

（いや、だめだだめだ！ 人の手帳を勝手に覗き見るなんてそんな卑）

「ちよっとだけ、見てみよっと」

心の中の天使の制止中に、君人はすでに手帳を開いていた。心底、自制心がない男だった。

「うわー、すごいな……裏千家つてお花だっけ、お茶だつたっけ……」

円の手帳のスケジュール欄を見た君人は純粹に感心した。

そこにはお花、お茶から始まって、バレエや着付けなど、およそお嬢様なら嗜んでいそうなすべての習い事が分刻みでびっしり詰まっていたからだ。

「やっぱり厳しい家なんだろうな……」

噂でしか聞いたことがないが、神宮寺家はかなりの名家らしい。そもそも自分とは住む世界が違う人間なのかもしれない。

「ん？」

君人はふと違和感を覚えた。何日かおきにとても小さい文字でスケジュール欄に書き込みがしてあるのを見つけたからだ。

「A・B殺……S・D殺……？」

注意しないと見逃しそうな小さな文字で、それは確かにそう書いてあった。

「なんかの暗号かな？」

ぱらぱらとページをめくると、ほかの場所にも同様の書き込みが数か所発見できた。お茶とお花のスケジュールに囲まれたその文言は、周囲から妙に浮いていて、なにやら不穏な空気を

纏っていた。

「兄ちゃん、ごはんだよー！」

階下から恭子が呼ぶ声がある。君人はへーい、と気のない返事をして手帳を机の引き出しにしまつて部屋を出た。

『本日未明、御塚神泉の会社員・堂本浩二さんが胸から血を流して倒れているところを通行人が発見し……』

「あ、また、通り魔殺人だつて。最近多いよねー、これ」

テレビを見ながらすでにハンバーグをばくついていた恭子がニュースに目敏く反応する。

「そうよ、恭子も気をつけなさい。あんたいつつも道草くつて遅くなるんだから」

「今日はちゃんと早く帰ってきたじゃーん」

「そうだけど、日頃からそうやって早く帰る習慣を……あらやだ、この御塚神泉3丁目つてすぐ近所じゃない」

恭子の母が眉間にしわを寄せながら、君人のご飯をよそっている。

「ふーん、ほんとだね、怖いね」

特に興味もなさそうに君人が反応する。そしてそのまま上の空でハンバーグに手をつけた。

君人の頭の中は円の手帳のことでいっぱいだったのだ。



「なんだろうな、『S・D殺』つて……」

君人はベッドの上で横になって手帳を眺めていた。

どうした拍子か、頭にほんやりとさきほどのニュースが甦つてくる。

『本日未明、御塚神泉の会社員・堂本浩二さんが――』『堂本浩二さんが――』『堂本浩二――』……K・D……

君人ははっとした。

手帳の今日の日付のところにはつきりと「K・D殺」と書いてあったからだ。

「はは、まさか……」

眩しながらも、君人はスマホの電源を入れ、ニュース検索をかけてみた。

……手帳に書いてある「○・○殺」と、ニュースで挙げられていた被害者のイニシャルと事件の起こった日がことごとく、完全に一致していた……。

「これって……」

君人の微かな眩きは夜の帳に静かに溶けていった。

翌日。

「どうしよっかなあ……」

放課後の人気のない体育館の裏で、手帳を持った君人は一人思案に暮れていた。

「やっぱ返さなきゃしょうがないよな……」

この先の旧校舎に円がある1年B組の教室がある。あの電車に乗るのなら、そろそろ彼女が旧校舎から出てくる頃合いだろう。

それを見計らうつもりで君人はここに来たわけだが、いざとなると何をどう言っているのか、どう彼女にこれを渡せばいいのか、まったく判らなかつた。

昨日のイニシャルのこともあつたし、正直、君人の心は乱れていた。

「……………ドラハンしよつと」

君人は鞆たぶたから携帯ゲーム機を取り出すと、そのまま「狩りひとかをし始めた。

完全な思考停止、現実逃避だ。

基本的に考えなしな男なのである。

「……その手帳……」

不意に背後から声が聞こえた。

君人が顔を上げると——そこにはいつになく厳まじしい表情で立つ神宮寺円の姿があつた。

「え？ あ、あわわ、こ、これは、あわわわ……」

ゲームに熱中しすぎて、いつの間にか手帳を落として、気がついた君人は泡あわを食べて弁解しようとしたが、慌おそてすぎてすでにまともには喋しゃべれなくなつていた。

「そ、そうだ、こ、ここに！ ここに落ちてたんだ、その手帳！ も、もしかしてそれ神宮寺さんのなの？！」

「見たのね？」

見え透いた嘘うそをつく君人を、円の冷たい視線と声音こゑが貫く。

「その手帳の中を見たのね？」

無機質な、抑揚よきようのないトーンで円が君人を問いつめる。

「は、はいっ！」

円の圧倒的なオーラに気圧けおされた君人は、なぜか両手を挙げ、ホールドアップの状態であつけなくそう白状してしまふ。

そしてその時、君人は初めて彼女が手にしている物に気がついた。

それは、鋭い刃を光らせた、薙刀なぎなただつた。

「ひっ……」

君人は思わず息を呑んだ。

しかし、円は無表情のまま、ゆっくりと君人の方へ歩を進めてくる。

「あなたは……あたしの秘密を……知ってしまったのね……」

「あ、あわわ、え、えーと、えーと……」

返答に詰まる君人を静かに見つめる円。

その瞳は冷徹で、酷薄で、非情な色を宿していた。

……それは殺人者の目に違いない、と君人は思った。

「こ、殺さないで！ と、通り魔の事は誰にも言わないから！」

「え？」

君人は土下座して円に頼み込んだ。

対する円は、君人の突然の土下座に戸惑っているような表情を見せた。

「通り魔って……なんのこと？」

「だ、だってその手帳に通り魔殺人の被害者のイニシャルがいっぱい書いてあったじゃない……！ じ、神宮寺さんがそれで殺したんでしょう!?!」

薙刀を指さして今にも泣きそうな君人と、事情が判らない、といった顔で君人を見つめる円とは、しばらく無言で対峙していた。

「……キングドラゴン……」

やがて円はぼそりと呟いた。

「エイシエントバハムート、シャイニングドラゴン……」

円の呟きは続く。そしてその呟かれる単語に、君人は聞き覚えがあった。

「ドラハンの……ボスキャラ……?」

君人の独り言のような問いかけに、円は小さく頷いた。

「キングドラゴン……K・D……エイシエントバハムート、A・B……シャイニングドラゴン、S・D……?」

君人の言葉に、円はまた小さくこくりと頷いた。

「お願い！」

「ひっ!?!」

今度は薙刀を投げ捨てた円が、君人の前に突然土下座した。

「あたし、ドラハン……っていうかゲームなんかしちゃいけないの！ そもそもゲーム機も持っていないことになってるの！ 家にはれたら大変なの！」

「う、うん」

「だから！ あたしがドラハンやってるってこと！ もうレベル600超えてるってこと！ 誰にも言わないで！ 秘密にして！」

「600!?!」

発売8日間で600超えてっ!?

1日24時間まるまるドラハンにつき込んでも、君人にはとても到達できるレベルには思えなかった。よほど効率の良い攻略法があるのだろうか。あるいは驚異的な反射神経とか。

「お願い!」

「は、はい! 誰にも言わない! 誰にも言いません! だからその薙刀しまってー!」
必死に言い募る円をなだめるように、君人は叫んで誓った。

「ありがとう……」

自身も緊張していたのか、円は薙刀を持ったままその場にへなへたと座り込んだ。

よっぽど必死だったのだろう。

「それにしても神宮寺さん、600超えなんて、すごいね……一体どうやったらそんなレベルまで行けるの? 教えてくれない?」

ようやく落ち着きを取り戻した君人が自分の携帯ゲーム機を円に差し出しながらそう尋ねた。
「あ、これあたしのキャラ……」

「え?」

君人のパーティーに組み込まれた「角馬」を見て、円は驚いたように呟いた。

「角馬……カドマ……かどま……まどか!? ああ、そういうことなの!?」

君人の問いに、円はまたこくりと頷いた。

それから彼女は居住まいを直し、その場に三つ指をつけて丁寧ていねいに頭を下げた。

「うちの角馬がお世話になっております」

「いいいえ、こちらこそ、大変強力な助っ人を得てめちゃめちゃクエストが進んでおります」
体育館裏で正座して頭を下げあう二人。

「ぶっ……くくく……くすくす……」

「あは……あはははは」

どちらからともなく二人は吹き出してしまふ。

「ねえ、神宮寺さん、これから一狩り一緒に行かない?」

「え?」

「やっぱりソロ攻略じゃ限界なところがあつてさ。火の国のクエスト、できれば協力プレイして欲しいんだけど」

「……あたしでよければ喜んで」

円は自分の鞆から携帯ゲーム機を出すと、につこりと微笑はほえんだのだった。

おしまい